

Q3：「しきい値」というのがあると聞きましたが、

何ですか？

A3：「しきい値」というのは、ある一定限度以下の被曝であれば人体に影響の出ない値のことをいいます。急性障害の出る値の下限は 100 ミリシーベルトです。それ以下では急性障害は出ませんが、晩発性障害の危険性があります。晩発性障害にしきい値はありません。日本の学者のなかには「100 ミリシーベルト未満の被曝では、発がん率上昇の明確な影響は確認されていません」などと述べる人がいます。しかし国際放射線防護委員会（ICRP）でさえ、「生体防衛機構は、低線量においてさえ、完全には効果的でないようなので、線量反応関係にしきい値を生じることにはありそうにない」という「しきい値なし仮説」を使っています。

Q4：「基準値」と「しきい値」はどう違うのですか？

A4：低線量被曝に「しきい値」はありません。原子力推進の学者は「しきい値はある、100 ミリシーベルト以下は安全だ」といっていますが、それは間違いです。被曝すればそれだけ細胞が傷つき、ガンなどになる危険性が増します。

基準値は別名「**がまん値**」ともいわれます。年間 1 ミリシーベルトという基準値は、1 万人に 1 人ががんで死ぬ確率の数値です。そこまでは我慢してくれという値なのです。文部科学省が学校での暫定基準値として設定して批判を浴びた年間 20 ミリシーベルトという数値は、現実の汚染があまりにひどいので、むりやり 20 倍の値を被ばく限度として設定した値です。それだけ「安全」が犠牲にされているのです。大人よりも放射線に対する感受性の高い子どもたちに「これまで通り、普通に生活しても支障はありません」と指導した文部科学省の責任が問われます。